

千葉県八千代市

公共事業関連遺跡発掘調査報告書

沼上遺跡

妙見前遺跡

川崎山遺跡 j 地点

新久遺跡

麦丸遺跡 c 地点

子の神台遺跡 a 地点

子の神台遺跡 b 地点

2003

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成6年度から平成14年度の期間に公共事業関連遺跡発掘調査事業として実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査遺跡名及び所在地、調査期間、調査面積、調査担当は下記のとおりでである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因	調 査 担 当
1 ぬまがみ 沼上遺跡	ひらとぬまがみ 平戸字沼上34-1	平成6年9月21日	確認調査 9.6m ² /48m ²	防火水構建設	秋山利光
2 みょうけんまゑ 妙見前遺跡	よしほしあがみょうけんまゑ 吉備守妙見前地先	平成10年1月12日 ～ 平成10年1月22日	確認調査 49m ² /316.8m ²	農道舗装	森 竜哉
3 かわさきやま 川崎山遺跡」地点	かわさきやま 栗田町字川崎山743-1、744-1	平成11年10月6日 ～ 平成11年10月29日	確認調査 873.5m ² /9,483.86m ² 本調査 53.5m ²	樹木伐採・移 植・抜根	武藤健一
4 あらく 新久遺跡	さやまあらく 佐山字新久2232付近	平成12年2月15日 ～ 平成12年2月17日	確認調査 32.8m ² /216m ²	農道舗装	武藤健一
5 むさまる 麦丸遺跡c 地点	むさまるあざさのやま 麦丸字ササメ山1160付近	平成12年2月23日 ～ 平成12年2月25日	確認調査 44.8m ² /324m ²	農道舗装	武藤健一
6 ねのかみだい 子の神台遺跡 a 地点	さやまあざんかみ 佐山字専上2267他	平成13年11月12日 ～ 平成13年11月15日	確認調査 28m ² /268m ²	農道舗装	常松成人
7 ねのかみだい 子の神台遺跡 b 地点	さやまあざんかみだい 佐山字ノ神台2321他	平成14年10月22日 ～ 平成14年10月30日	確認調査 32m ² /240m ²	農道舗装	武藤健一

3. 整理作業及び報告書作成作業は、森竜哉・武藤健一が担当し、平成14年12月16日から平成15年2月21日までの期間実施した。
4. 本書の執筆は、1・3・4・5・7を武藤健一が、2を森竜哉が、6を常松成人・武藤健一が行った。編集は武藤健一が行った。
5. 土層説明の色調の表記法については、一部、小山正忠・竹原秀雄『新版 標準土色帖』（13版1993.3）を用いている。
6. 各遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
7. 発掘調査に伴う出土遺物及び図面・写真等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

目 次

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

写真図版目次

1. 沼上遺跡	2
2. 妙見前遺跡	3
3. 川崎山遺跡 j 地点	8
4. 新久遺跡	15
5. 麦丸遺跡 c 地点	17
6. 子の神台遺跡 a 地点	20
7. 子の神台遺跡 b 地点	22

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

調査遺跡位置図

第1図 沼上遺跡・新久遺跡・子の神台遺跡位置図	1
第2図 沼上遺跡トレンチ配置図	2
第3図 妙見前遺跡位置図	3
第4図 妙見前遺跡遺構検出状況図	4
第5図 妙見前遺跡堀跡土層断面図	5
第6図 妙見前遺跡出土遺物	6
第7図 川崎山遺跡位置図	8
第8図 川崎山遺跡 j 地点遺構配置図	9
第9図 川崎山遺跡 j 地点土層断面図	10
第10図 川崎山遺跡 j 地点土坑実測図	12
第11図 川崎山遺跡 j 地点溝実測図	13

第12図 新久遺跡トレンチ配置図	15
第13図 新久遺跡土層断面図	16
第14図 新久遺跡出土遺物	16
第15図 麦丸遺跡位置図	17
第16図 麦丸遺跡 c 地点遺構検出状況図	18
第17図 麦丸遺跡 c 地点土層断面図	19
第18図 子の神台遺跡 a 地点トレンチ配置図	20
第19図 子の神台遺跡 a 地点土層断面図	21
第20図 子の神台遺跡 b 地点遺構検出状況図	22
第21図 子の神台遺跡 b 地点土層断面図	23
第22図 子の神台遺跡 b 地点 2 T 住居跡実測図	23
第23図 子の神台遺跡 b 地点 2 T 住居跡出土遺物	24

表 目 次

第1表 子の神台遺跡 b 地点 2 T 住居跡出土遺物観察表	25
--------------------------------	----

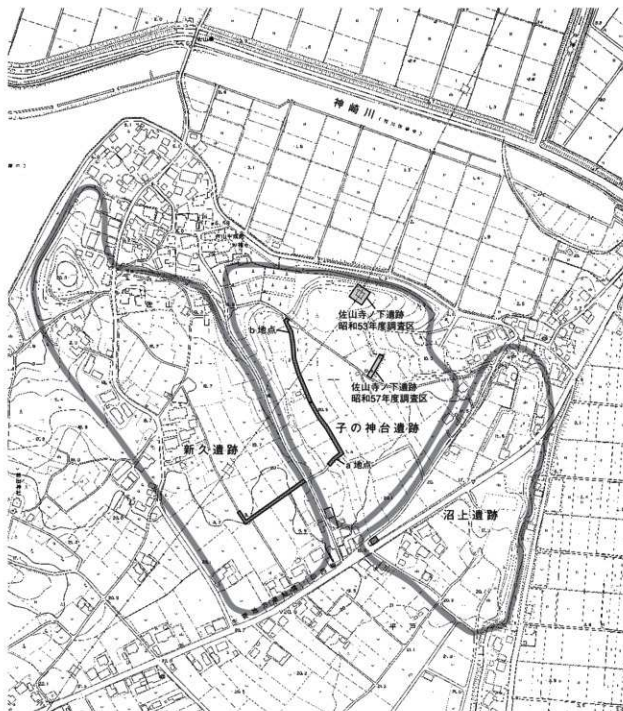
写真図版目次

- 図版 1 (1) 沼上遺跡調査前近景
(2) 沼上遺跡トレンチ完掘状況
(3) 妙見前遺跡調査前近景
(4) 妙見前遺跡 1T土層断面
(5) 妙見前遺跡11T溝検出状況
(6) 妙見前遺跡12T地形整形遺構検出状況
(7) 妙見前遺跡16T地形整形遺構検出状況
(8) 妙見前遺跡17T地形整形遺構検出状況
- 図版 2 (1) 川崎山遺跡 j 地点調査前遺跡近景
(2) 川崎山遺跡 j 地点A1-73-4G土層断面
(3) 川崎山遺跡 j 地点 1号土坑土層断面
(4) 川崎山遺跡 j 地点 1号土坑完掘状況
(5) 川崎山遺跡 j 地点 2号土坑土層断面
(6) 川崎山遺跡 j 地点 2号土坑完掘状況
(7) 川崎山遺跡 j 地点 3号土坑土層断面
(8) 川崎山遺跡 j 地点 3号土坑完掘状況
- 図版 3 (1) 川崎山遺跡 j 地点 1号溝完掘状況
(2) 川崎山遺跡 j 地点 2号溝完掘状況
(3) 川崎山遺跡 j 地点 3号溝完掘状況
(4) 川崎山遺跡 j 地点調査風景
(5) 新久遺跡調査前近景 (北東から)
(6) 新久遺跡調査前近景 (南西から)
(7) 新久遺跡 5T土層断面
(8) 新久遺跡調査風景
- 図版 4 (1) 麦丸遺跡 c 地点調査前近景 (東から)
(2) 麦丸遺跡 c 地点調査前近景 (西から)
(3) 麦丸遺跡 c 地点10T土層断面
(4) 麦丸遺跡 c 地点調査風景
(5) 子の神台遺跡 a 地点調査前近景
(6) 子の神台遺跡 a 地点トレンチ完掘状況
(7) 子の神台遺跡 a 地点 2T土層断面
(8) 子の神台遺跡 a 地点 5T土層断面
- 図版 5 (1) 子の神台遺跡 b 地点調査前近景 (南から)
(2) 子の神台遺跡 b 地点調査前近景 (北から)
(3) 子の神台遺跡 b 地点 1T土層断面
(4) 子の神台遺跡 b 地点 2T住居跡検出状況
(5) 子の神台遺跡 b 地点 2T住居跡遺物出土状況
(6) 子の神台遺跡 b 地点 2T住居跡遺物出土状況
(7) 子の神台遺跡 b 地点調査風景
(8) 子の神台遺跡 b 地点調査風景
- 図版 6 妙見前遺跡出土遺物
新久遺跡出土遺物
- 図版 7 子の神台遺跡 b 地点出土遺物



調査遺跡位置図 (S=1:50,000)

1. 沼上遺跡



第1図 沼上遺跡・新久遺跡・子の神台遺跡位置図 (S=1:5,000)

調査に至る経緯

平成6年6月1日、八千代市消防本部より市内平戸字沼上34-1の48㎡について防火水槽建設のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は畑地で、照会地及び隣接する畑地において稀少ではあるが縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の隣接した遺跡の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、6月13日その旨回答した。その後、この回答に沿って八千代市消防本部と協議した結果、6月16日文化財保護法第57条の3第1項の規

定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った9月21日に八千代市教育委員会が調査を開始した。

遺跡の立地と概要

沼上遺跡は、八千代市北部、神崎川南西岸の旧印旛沼の低地を臨む台地上の先端部に立地している。今回の調査区は台地中央の平坦部に位置している。調査区周辺の標高は20m前後、神崎川沿いの水田面との標高差は約17mである。

沼上遺跡が所在する台地上一帯は畑地が広がる農村地帯である。しかし、近年、住宅団地や基盤整備、農道・県道の施設、台地縁辺部の土取りなどによって、少しずつ様相が変化してきている。これらの開発に伴い沼上遺跡に隣接する道地遺跡・子の神台遺跡・新久遺跡では、数地点にわたって調査が実施されており、縄文時代から平安時代の多岐に至る遺構・遺物が検出されている。今回の調査においても該期の遺構の所在が想定された。

調査の方法と経過

調査は、平成6年9月21日に実施した。既に工事が開始されており、防火水槽の枠が組み上げられていた状況ではあったが、中に入り、調査区の形状に合わせて約0.7m×7mのトレンチを2カ所設定して実施した。トレンチの掘り下げは人力で行い、その後遺構検出作業、実測・写真等記録作業を行い調査を終了した。

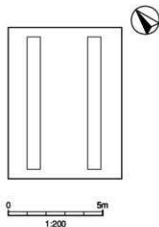
調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土層（耕作土層）、Ⅱソフトローム層である。人力でトレンチを掘り下げた結果、約30～40cm程度でソフトローム面に達した。遺構検出作業はⅡソフトローム層の上面で行った。

調査の結果、農耕によるトレンチャー痕が確認できるのみで、遺構・遺物は検出されなかった。

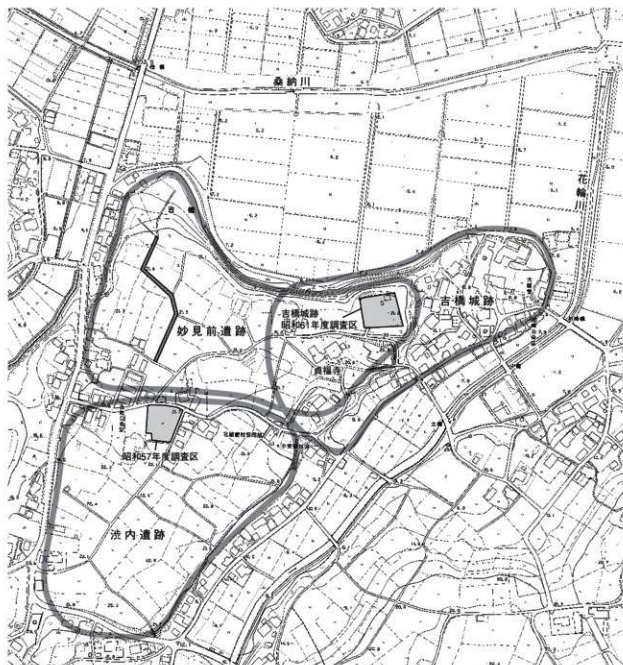
調査のまとめ

今回の調査では、遺構・遺物を検出することはできなかった。過去の隣接する遺跡の調査実績から考えると、遺構・遺物が検出される可能性が高いと判断されたが、調査面積が48㎡と狭いため、やむを得ない結果であったといえる。



第2図 沼上遺跡トレンチ配置図

2. 妙見前遺跡



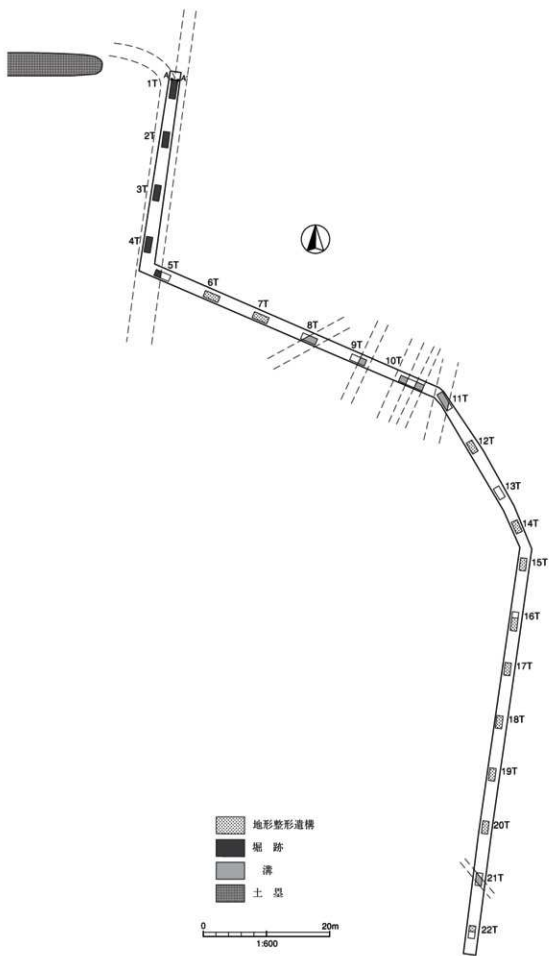
第3図 妙見前遺跡位置図 (S=1:5,000)

調査に至る経緯

平成9年11月、八千代市長（八千代市役所農政課）から農道舗装を目的とした工事を吉橋町妙見前で予定しているため、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受けて八千代市教育委員会で現地踏査を実施したところ、農道周辺の畑地には弥生土器片・土師器片・陶器片等がまばらに分布している状況であった。この旨、千葉県教育委員会に副申した結果、試掘による判断が望ましいとの指導により試掘を実施した。その結果、中世堀跡等を発見したため遺跡が存在する旨八千代市長に回答した。八千代市役所農政課との調整により、農道の使用頻度が低くなる平成10年1月に発掘調査を開始した。

遺跡の立地と概要

妙見前遺跡は、市域の中央部、桑納川の南岸を臨む標高約21～22mの台地上平坦部に位置する。水田面との比



第 4 図 妙見前遺跡遺構検出状況図

高差は、13～14mである。この桑納川南岸に位置する寺台・吉橋・麦丸周辺は、南から桑納川南岸にいたる支谷によって分断され、各々が独立した狭長な舌状台地となっている。遺跡はその先端部に位置している。

本遺跡は縄文・奈良・平安時代の遺物包蔵地と中世吉橋城関連施設と考えられる土塁跡として周知されているが、今回を除いて、発掘調査が実施されたことはない。

周辺地区での調査例では、昭和57年度に南側隣接地の渋内遺跡において、八千代市教育委員会が本調査を実施している（註1）。1,300m²について調査が実施され、中世の地下式横穴11基、土壇1基を検出している。出土遺物は陶磁器片を中心に板碑片、アカニシ（巻貝）、縄文・弥生土器片が少量である。また、西側隣接地の吉橋城跡内において、昭和61年度に八千代市教育委員会が確認調査を実施している（註2）。調査の位置は、1郭に比定される北側の郭内である。その結果、中世の溝状遺構10条、ピット33基、土壇9基等を検出した。また、遺物は中世陶器片等が少量出土している。

吉橋城跡は二郭からなる連郭式の城跡で、城単体の規模は17,000～20,000m²程度である。更に防壁上や生活上の施設を含めると西側では県道船橋印西線を境に、南では八幡神社付近、東から北は谷津と城を見下ろす集落を含む範囲が、大きな意味で城域と言える（註3）。

調査の方法と経過

調査対象地は、現状の農道に簡易舗装を敷設する計画であることから、幅員等の変更は全く伴わないものであった。このことから、排土場所確保の関係もあり、小型のバックホウを用いて、幅0.7mのバケットでトレンチを掘り下げていくこととした。また、舗装対象の農道は全長約172mと長いので、前半と後半に調査期間をわけて実施した。調査は、道路の長軸に並行して幅0.7m、長さ2.5mのトレンチを設定し適宜拡張しながら遺構確認に努めた。

調査期間は、前半が平成10年1月12日～同月14日で、後半が同年1月19日～同月22日である。前半の経過は12日トレンチ設定後バックホウによるトレンチ掘り下げ、13日トレンチ精査と写真撮影、14日7・11・21トレンチの土層断面図作成、その他図面類作成後トレンチの埋め戻しを行い終了した。後半の経過は19日トレンチ設定後バックホウによるトレンチ掘り下げ、20日1～4トレンチ精査と写真撮影、21日1～4トレンチの土層断面図作成、22日5～10トレンチ精査後、遺構確認状況の実測図作成を行って器材撤収等現場全作業を終了した。

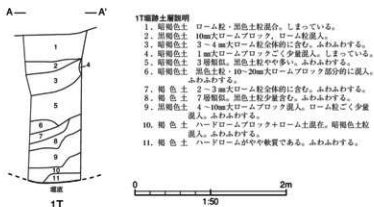
調査の概要

トレンチ掘り下げの際の排土場所確保や拡張の難しさ等制約を受けた調査のため、点と線による遺構確認と想定に頼らなければならない部分が多いが、少なからず成果をあげることができた。

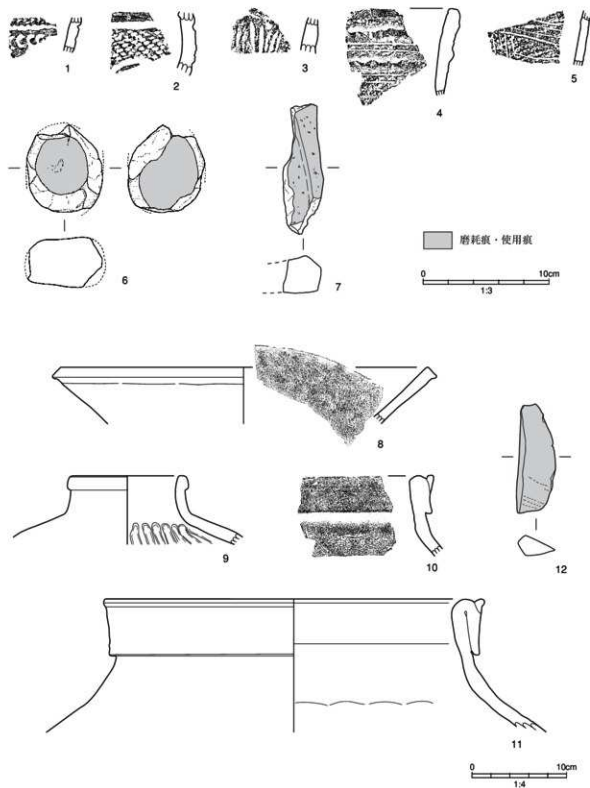
本遺跡の基本層序は1層農道硬化面、2層耕作土、3層暗褐色土（整地層）、4層ハードルーム（自然堆積）で4層上面において遺構確認を行った。また、部分的に1層下にソフトルームという堆積が見られた。

調査の結果、中世堀跡1条、溝跡6条、地形整形遺構（ハードルームを基盤層として、上層に暗褐色土をのせている状態）11箇所を確認した。15トレンチ（以下Tと略す）・18Tでは暗褐色土層中において硬化面や褐色土の掘り込みが見られた。また、7Tではピット3基が検出された。

中世堀跡1条は堀幅不明、深さ2.0～2.2mである。1～5Tで検出された。1T西側の範囲外に幅約3m、高さ約1mの東西方向の土塁と1T北側に南北方向の土塁状の高まりが遺存していることから、堀が1T付近で北方



第5図 妙見前遺跡堀跡土層断面図



第6図 妙見前遺跡出土遺物

向と西方向に分岐するであろう状況がうかがえる。トレンチで確認している全長は約30mである。堀の覆土は上層ではロームブロックを含んだ暗褐色土、下層ではローム土を主体とした褐色土である。覆土上層から中層に厚さ0.1～0.15mの硬化面が見られる。堀が埋まる過程に道として機能していたものであろう。

溝状遺構は6条検出している。各々について概要をのべる。8Tでは幅2～2.5m、深さ0.3m（ハードローム上面確認）で東西方向に走っている。9Tでは幅不明、深さは確認面から1.0m以上である。10Tでは2条の溝と

ビット1基が確認された。また、溝内から中世陶器片が出土している。11Tでは幅1.8m以上、深さ0.3mで南北方向に走っている。21Tでは幅1.35m、深さ0.35mで北西方向に走っている。覆土は上層でローム主体の褐色土、下層で黒色土を混入した暗褐色土である。

地形整形遺構は点のみで把握せざるを得ない。前述したように、客土としての暗褐色土下に自然層のハードローム層が堆積している状態をもって判断している。通常の自然堆積では、Ⅰ表土、Ⅱ黒色土、Ⅲ新期テフラ層、Ⅳ暗褐色土、Ⅴソフトローム層、Ⅵハードローム層という大まかな堆積を示すが、ここではⅠ→客土→Ⅵという大規模な土の移動を伴う土木工事が行われたと想定せざるを得ない。南側隣接地の洗内遺跡においてもハードローム層まで掘り下げた人為的窪地の遺構が検出されている。かかる土木工事はどういった理由で行われたのだろうか。通常の地上構築物ないし整地等の整備であれば、ここまでの掘削等を伴う必要性はない。赤土、黒土をなんらかの目的で使用するためか地面を下げるための目的があったのではないだろうか。例えば土塁の構築や家畜の放牧場、墓域の設置等である。面としての遺構の把握が困難である以上、想像の域を超えられない。

遺物は1T～5Tの堀覆土中と10Tの溝内から出土している。時代別にみると、縄文時代前期（浮島Ⅲ式）、中期（加曾利EⅡ～Ⅲ式）、後期（堀之内式～加曾利B式）の土器片少量と磨石・石皿片各1点、弥生時代後期～古墳時代前期の壺胴部片1点、中世15世紀後半常滑焼の鉢、甕、大甕が出土している。

調査のまとめ

今回の調査において、本遺跡が中世の堀跡、溝、地形整形遺構からなる吉橋城関連の施設であることがわかった。地形整形遺構の具体的な内容は不明であり、今後に待たなければならない点が多い。堀については、北側では堀に直行した土塁にとりつき可能性が高い。南では1T～5Tを更に南に進み、船橋印西線に緩やかに角度を変えてぶつかる。その場所は台地縁辺の急傾斜部分と考える。これによって台地北側の緩傾斜面と西側部分の防衛としたのではないだろうか。また、出土遺物から吉橋城が15世紀後半に存在していた事実がうかがえよう。

吉橋城本体とは直線距離200mの位置に堀が存在している事実や、地下式竈を多数検出している洗内遺跡等、城としての包括的な範囲を考えていかなければ、実態は把握できないと思われる。

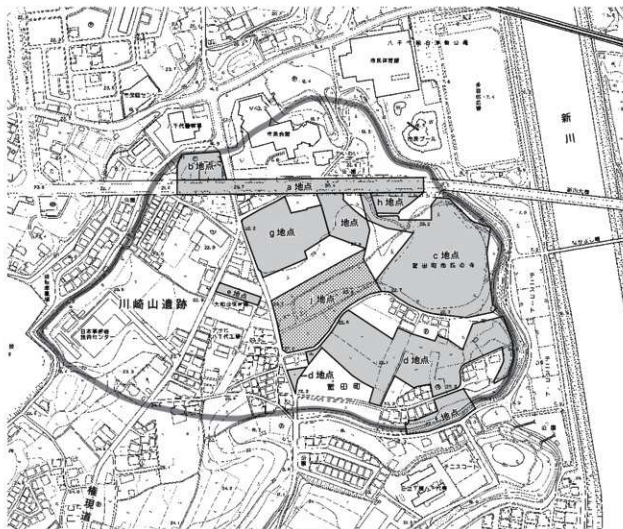
〔註1〕八千代市教育委員会 1983 『千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告書』

〔註2〕八千代市教育委員会 1987 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集』

〔註3〕八千代市史編さん委員会編 1979 『八千代市の歴史』 八千代市

※第3章中世第4節吉橋城址 P215～225に負うところが多い。

3. 川崎山遺跡 j 地点



第7図 川崎山遺跡位置図 (S=1:5,000)

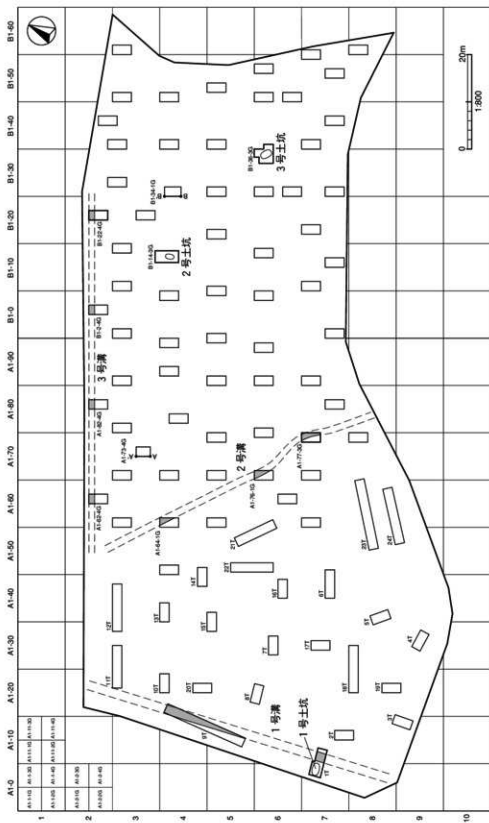
調査に至る経緯

平成11年6月21日、八千代市長（八千代市役所公園緑地課）より市内萱田町字川崎山743-1、744-1の7,836㎡について公園用地の返還に伴う樹木の伐採・移植・抜根工事のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、照会地は「萱田町樹木見本園」及び「萱田町市民の森」の公園用地として利用されており、現況は樹木園及び山林であった。照会地内において遺物の散布を確認することはできなかったものの、照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、6月13日その旨回答した。その後、この回答に沿って八千代市役所公園緑地課と協議した結果、9月28日文化財保護法第57条の3第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った10月6日に八千代市教育委員会が調査を開始した。最終的に、9,483.86㎡について調査を実施した。

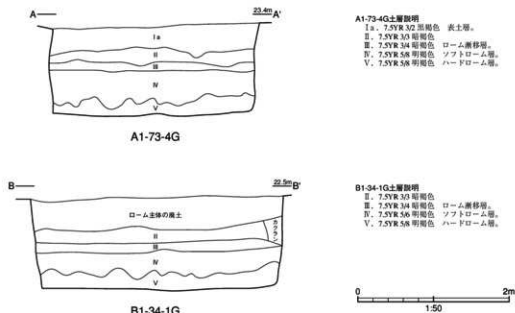
遺跡の立地と概要

川崎山遺跡は、八千代市南部、新川西岸の台地上に立地している。この台地は南側と北から西側にかけてをそれぞれ新川の低地から入り込む谷津によって開析されている。標高は約20～24mを測り、新川の低地との標高差は約13～17mである。

川崎山遺跡周辺は、平成8年に開通した東葉高速鉄道の八千代中央駅や村上駅に近いこともあり、近年宅地造



第8図 川崎山遺跡「地点遺構配置図」



第9図 川崎山遺跡 j 地点土層断面図

成などの開発が盛んな地域である。これらの開発に伴い川崎山遺跡では既に9カ所の地点（a～i地点）にて調査が実施されており、旧石器時代から平安時代の多岐に至る遺構・遺物が検出されている（註1）。これらの調査成果から縄文時代の陥し穴状土坑を中心とした遺構は台地縁辺部から中央平坦部にかけての広範囲に展開し、弥生時代から平安時代の集落は台地縁辺部を中心に展開するという傾向が窺える。また、近世から近代にかけても川崎山遺跡周辺は人々の往来が絶えなかった地域であったようである。川崎山遺跡内には成田街道（現国道296号線）の大和田宿と萱田飯綱神社（飯綱大権現）を結ぶ権現道が南北に走っており、特に境内で市が開かれる日には多くの人が列をなしていたということである。

今回の調査区はj地点である。川崎山遺跡では10カ所目の地点にあたる。j地点は標高22～23m前後の台地中央の平坦部に位置している。前述のように川崎山遺跡では既に9地点において調査が実施されており、j地点の東側に隣接するc地点においては旧石器時代遺物出土地点1カ所、縄文時代陥し穴状土坑13基、弥生時代後期～奈良平安時代の住居跡51軒等、南側に隣接するd地点においては縄文時代土坑7基、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡34軒等が検出されている（確認調査）。また、j地点の西側約30mに位置するe地点においては縄文時代陥し穴状土坑1基、北側約50mに位置するg地点においては縄文時代陥し穴状土坑4基の他、溝2条が検出されている。これらの調査成果から前述のように、縄文時代の陥し穴状土坑を中心とした遺構は台地縁辺部から中央平坦部にかけての広範囲に展開し、弥生時代から平安時代の集落は台地縁辺部を中心に展開するという傾向が窺え、今回調査を行うj地点はこれらの地点の中間に位置する。そのため今回は、台地縁辺部を中心に展開する弥生時代から平安時代の集落がどこまで広がるのかその限界を明らかにすることに主眼を置いて調査を実施した。

調査の方法と経過

調査は調査区全体にグリッド（方眼）を組んで実施した。グリッドは、調査区の形状に合わせて100m×100mの大グリッドを設定し、さらに大グリッドを10m×10mの中グリッドに100分割し、またさらにこの中グリッドを5m×5mの小グリッドに4分割した。北西隅を起点として大グリッドの西から東へA・B・C・・・とアルファベットで表記し、北から南へ1・2・3・・・と数字で表記した。中グリッドは、10m×10mのグリッド個々に1・2・3～100の番号を付けて表記した。大グリッド内の北西隅を1とし、南東隅を100としている。小グリッドは、5m×5mのグリッド個々に1・2・3・4の番号を付けて表記した。グリッドの呼称は、

「A1-1-1G, A1-1-2G, A2-99-3G, A2-100-4G, ……」のように大・中・小のグリッドの表記の組み合わせにより行った。

調査区の現況は樹木園及び山林で、調査区西部が中低木を主体とした「萱田町樹木見本園」（以下「樹木見本園」と略）、中央から東部にかけてが高木を主体とした「萱田町市民の森」（以下「市民の森」と略）の公園用地として利用されていた。調査は、樹木見本園であった西部においては樹木が比較的密集していることからこれを避ける形で任意に幅2mのトレンチを設定し、市民の森であった中央から東部においては樹木を避けながらグリッドに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。トレンチの表土除去作業は西部については重機の進入が不可能な部分が多いため人力を主体とし、中央から東部についてはすべて重機で行った。遺構の検出状況を確認しながら、適宜トレンチの延長・増設を行い遺構の捕捉に努めた。最終的には873.5m²について表土除去・検出作業を行ったが、検出された遺構が少なかったため、遺構の周辺のみトレンチを拡張し、これらの遺構の本調査も併せて行った。

調査期間は平成11年10月6～29日である。6日器材搬入、6・7日グリッド杭及びトレンチ設定、7～19日人力及び重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、14～29日遺構調査、実測・撮影等記録作業、28・29日重機によるトレンチ埋め戻し作業、29日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、Ia表土層、Ib表土層（耕作土層）、II暗褐色土層、IIIローム漸移層、IVソフトローム層、Vハードローム層となっている。調査区中央から東部の市民の森の山林部は、一部にIa表土層～II暗褐色土層を削土後、ローム主体の廃土が盛土されている範囲が確認されたものの、全体的に土層の遺存状態は良好であった。調査区西部の樹木見本園は、公園用地となる前は畑地として利用されていた。そのためであろうか、II暗褐色土層とIIIローム漸移層が認められず、Ib表土層（耕作土層）下がIVソフトローム層となっているところがほとんどであった。なお、遺構検出作業はIVソフトローム層の上面で行った。地表面から遺構検出作業面までの深さは約0.4～0.8mである。

調査の結果、縄文時代陥し穴状土坑3基、近世以降溝3条を検出することができた。遺物の出土はなかった。

1号土坑

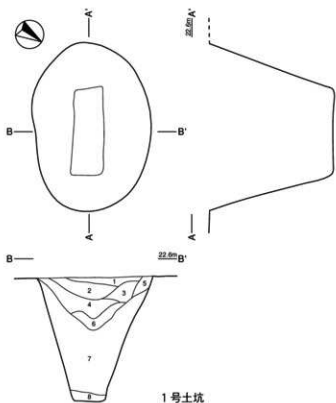
1Tより検出された。形状等から縄文時代の陥し穴状土坑とした。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸2.65m×短軸1.85m×深さ1.98mで、主軸方位はN-60°Eである。壁は上部に向かって緩やかに外傾して立ち上がる。底部はほぼ平坦で長方形を呈する。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。覆土は1～6及び8層が自然堆積層、7層がロームを主体とする人為的な埋土と考えられる。1～6層は締まりのある土で、7・8層は締まりが弱くボソボソした土である。遺物の出土はなかった。

2号土坑

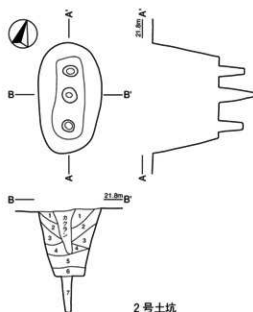
B1-14-3Gより検出された。形状等から縄文時代の陥し穴状土坑とした。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸1.75m×短軸1.02m×深さ1.06mで、主軸方位はN-17°Wである。壁は上部に向かって緩やかに外傾して立ち上がる。底部はほぼ平坦で隅丸長方形を呈する。底部施設は3基確認されており、規模は北側が長軸0.24m×短軸0.18m×深さ0.4m、中央が長軸0.23m×短軸0.23m×深さ0.56m、南側が長軸0.18m×短軸0.18m×深さ0.4mである。覆土は1～6層が自然堆積層、7層がロームを主体とする人為的な埋土と考えられる。1～6層は締まりのある土で、7層は締まりが弱くボソボソした土である。遺物の出土はなかった。

3号土坑

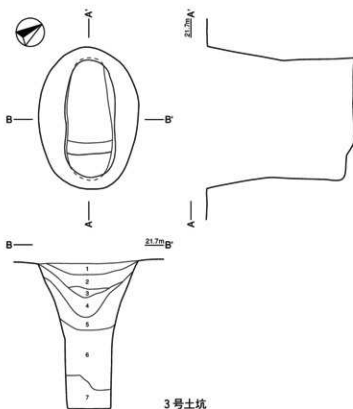
B1-36-3Gより検出された。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸2.26m×短軸1.56m×深さ2.32mで、主軸方位はN-55°Wである。壁は下半部はほぼ垂直に立ち上がり、上半部は上部に向かって緩やかに外傾して立ち上がる。底部はほぼ平坦であるが、東端にテラス状の段が認められる。底部施設などの明確な掘り込みは認められなかった。覆土は1～4及び7層が自然堆積層、5・6層がロームを主体とする人為的な埋土と考えられる。1



1号土坑



2号土坑



3号土坑

1号土坑土層説明

1. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
2. 7.5YR 2/1 黒色 締まりあり。
3. 7.5YR 3/1 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 ローム粒を少量含む。締まりあり。
5. 7.5YR 4/4 褐色 ローム粒を少量含む。締まりあり。
6. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
7. 7.5YR 5/6 明褐色 ローム主体の上。部分的に径20~30mmのロームブロックを少量含む。締まり弱く、ボソボソしている。
8. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まり弱く、ボソボソしている。

2号土坑土層説明

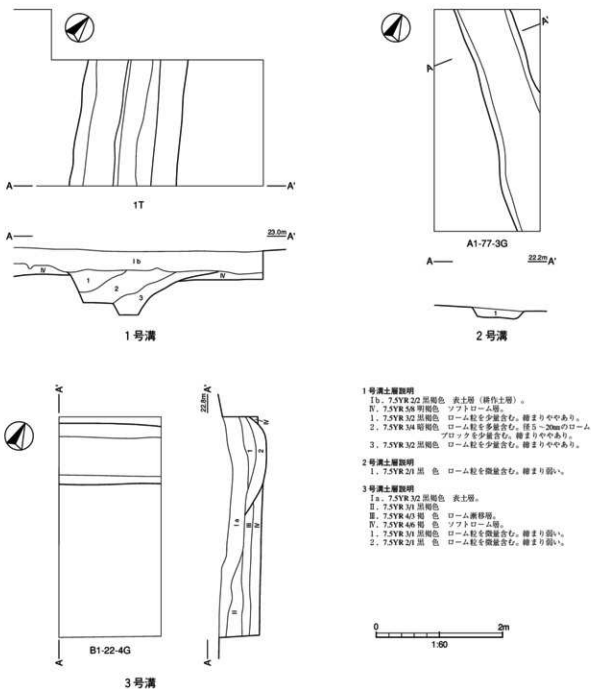
1. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
2. 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム粒を少量含む。締まりあり。
3. 7.5YR 4/4 褐色 ローム粒を少量含む。締まりあり。
4. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
5. 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム粒を少量含む。締まりあり。
6. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
7. 7.5YR 4/3 褐色 ローム主体の上。ローム粒を多量含む。径5~10mmのロームブロックを多量含む。締まり弱く、ボソボソしている。

3号土坑土層説明

1. 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒を微量含む。締まりあり。
3. 7.5YR 2/1 黒色 締まりあり。
4. 7.5YR 3/4 暗褐色 締まりあり。
5. 7.5YR 4/6 褐色 ローム主体の上。締まりややあり。
6. 7.5YR 4/6 褐色 ローム主体の上。径10~30mmのロームブロックを多量含む。締まり弱く、ボソボソしている。
7. 7.5YR 2/1 黒色 ローム粒を微量含む。締まりややあり。



第10図 川崎山遺跡 j 地点土坑実測図



第11図 川崎山遺跡j地点溝実測図

～4層は締まりのある土で、6層は締まりが弱くボソボソした土である。遺物の出土はなかった。

1号溝

1T及び9Tより検出された。調査区西側の道路に沿って南北に延びる。この溝の北の延長はg地点でも検出されており、近世以降の土地の境界溝と思われる。1Tにおける溝の幅は1.6～1.7mである。壁は西壁は上部に向かって外傾して立ち上がり、東壁は下半部は西壁と同様に上部に向かって外傾して立ち上がるが上半部はさらに角度が緩くなっている。底部は二段底となっており西側が浅いがいずれの面もほぼ平坦である。深さは西側が0.4m、東側が0.6mである。形状及びセクションから判断するとこの溝は過去に2度の掘り返しが行われているようである。遺物の出土はなかった。

2号溝

A1-64-1G, A1-76-1G, A1-77-3Gより検出された。樹木見本園と市民の森の地境に沿って南北に延びる。近世以降の畑地と山林の間の境界溝と思われる。A1-77-3Gにおける溝の幅は0.8～0.9m、深さは0.1～0.2mである。断面は逆台形を呈しており、壁は上部に向かって外傾して立ち上がる。底部は少し凹凸がある平底である。遺物の出土はなかった。

3号溝

A1-62-4G, A1-82-4G, B1-2-4G, B1-22-4Gより検出された。調査区北側の地境に沿って南北に延びる。近世以降の土地の境界溝と思われる。B1-22-4Gにおける溝の幅は0.9～1.0m、深さは0.03～0.1mである。断面皿状で非常に浅い。地表面で約0.2m程の溝状の窪みを確認することができる。遺物の出土はなかった。

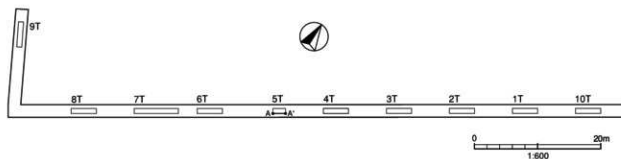
調査のまとめ

j地点は台地中央の平坦部に位置しており、その東隣の台地縁辺部に位置するc地点においては弥生時代から平安時代の集落が検出されている。そのため今回の調査においては、台地縁辺部を中心に展開する弥生時代から平安時代の集落がどこまで広がるのかその限界を明らかにすることに主眼が置かれた。調査の結果、縄文時代陥し穴状土坑3基、近世以降溝3条が検出されたのみで、弥生時代から平安時代の住居跡等の遺構は検出することができず、c地点で検出された集落はj地点まで展開していないことが明らかとなった。今回の調査結果は、過去の調査成果から得られた縄文時代の陥し穴状土坑を中心とした遺構は台地縁辺部から中央平坦部にかけての広範囲に展開し、弥生時代から平安時代の集落は台地縁辺部を中心に展開するという傾向をより明確にしたといえる。

平成14年度八千代市遺跡調査会によりd地点の本調査が実施され、縄文時代陥し穴状土坑16基、弥生時代後期～奈良平安時代の住居跡26軒等が検出された。今後引き続き整理作業を実施し、報告書を刊行する予定である。川崎山遺跡全体としての時期・時代による占地形態がより明らかになるものと思われる。

- (註1) a地点 八千代市遺跡調査会 1979 『豊田町川崎山遺跡発掘調査報告』
b地点 八千代市教育委員会 1992 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成3年度』
八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書』1
c地点 八千代市教育委員会 1994 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』
八千代市川崎山遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市川崎山遺跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書—』
d地点 八千代市教育委員会 1998 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』
e地点 八千代市教育委員会 1998 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』
f地点 八千代市教育委員会 1999 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』
g地点 八千代市教育委員会 1999 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』
h地点 八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
i地点 八千代市教育委員会 2000 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』

4. 新久遺跡



第12図 新久遺跡トレンチ配置図

調査に至る経緯

平成11年11月15日、八千代市長（八千代市役所農政課）より市内佐山字新久2232付近の90㎡について農道舗装のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会が現地踏査を行ったところ、照会地及び隣接する畑地において縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、また過去の隣接した遺跡の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、11月18日その旨回答した。さらに11月29日農道の延長部分126㎡について追加の照会が提出され、現地踏査の結果、12月7日先の回答と同様に照会地全域について確認調査が必要との回答を行った。その後、この回答に沿って八千代市役所農政課と協議した結果、平成12年1月20日併せて216㎡について文化財保護法第57条の3第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った2月15日に八千代市教育委員会が調査を開始した。

遺跡の立地と概要

新久遺跡は、八千代市北部、神崎川南岸の台地上に立地している（第1図）。新久遺跡の立地する台地は東側と西側を神崎川の低地から入り込む谷津によって開析されている。今回の調査区は遺跡の東側に入り込む谷津の最奥部の台地上に位置している。調査区周辺の標高は20m前後である。

新久遺跡が所在する台地一帯は畑地が広がる農村地帯である。しかし、近年、住宅団地や基盤整備、農道・県道の施設、台地縁辺部の土取りなどによって、少しずつ様相が変化してきている。これらの開発に伴い新久遺跡に隣接する子の神台遺跡・道地遺跡・田原窪遺跡・佐山貝塚・平戸台古墳群では、数地点にわたって調査が実施されており、縄文時代から平安時代の多岐に至る遺構・遺物が検出されている。今回の調査においても該期、特に新久遺跡は佐山貝塚に隣接し、調査区周辺においても縄文土器の散布が多いことから縄文時代の遺構の検出が想定された。

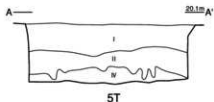
調査の方法と経過

調査は、調査区が幅約2mの農道であるため、道の中央に0.8m×4mを基本とするトレンチを10箇所、約6m間隔で設定して実施した。状況に応じて適宜トレンチの延長を行い、32.8㎡について表土除去・検出作業を行い、遺構の捕捉に努めた。

調査期間は平成12年2月15～17日である。15日器材搬入、トレンチ設定、人力による1T・4T・8T・9T表土除去作業、遺構検出作業、人力による埋め戻し作業、16日重機による2T・3T・5T・6T・7T・10T表土除去作業、遺構検出作業、5T土層断面実測・撮影等記録作業、重機によるトレンチ埋め戻し作業、17日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土層、Ⅱ旧耕作土層、Ⅲソフトローム層、Ⅳハードローム層となっている。農耕によるためであろうか、Ⅱ旧耕作土層下は、1T・2T・6T・7T・8T・9T・10Tがソフトローム層、3T・4

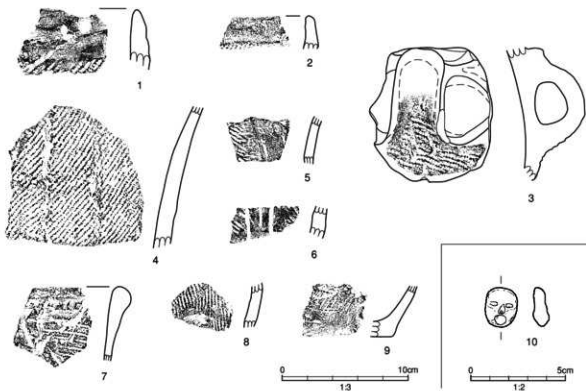


5T土層説明

- I. 表土層 暗褐色土主体の土、硬化している。
- II. 旧跡付土層 暗褐色土主体の土、ローム粒を多量含む。厚30mm以下のローム粒を多量に含む。
- III. ソフトローム層
- IV. ハードローム層



第13図 新久遺跡土層断面図



第14図 新久遺跡出土遺物

T・5Tがハードローム層であった。地表面から遺構検出作業面までの深さはそれぞれ約0.3～0.5m、約0.7～0.9mである。

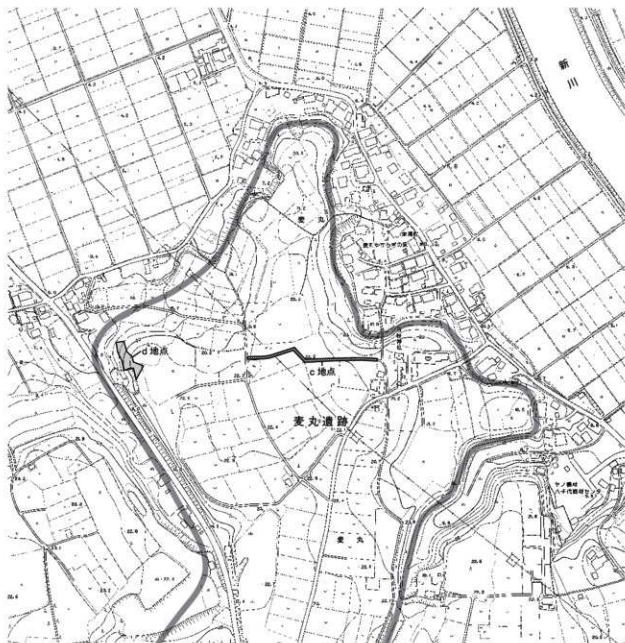
調査の結果、遺構は検出することができなかった。遺物は、縄文土器を中心に43点出土した。縄文中期末～後期初め、特に加曾利E4式を主体としており（第15図1～6）、その他に晩期安行3a式（同図7）、弥生土器（同図8・9）、泥めんこ（同図10）なども出土している。

調査のまとめ

今回の調査では、遺構を検出することはできなかった。過去の隣接する遺跡の調査実績から考えると、遺構が検出される可能性が高いと判断されたが、調査区が幅約2m、長さ約115mの農道部分のみであることからやむを得ない結果であったといえる。

なお、今回の調査期間中に調査区北側約200mの台地先端部付近の畑地において、住居跡と思われる黒いしみを8箇所確認した。遺物の散布も調査区北側に多く確認できることから、遺跡の主体は調査区の北側から台地先端部にあると思われる。調査区付近は遺構の分布が稀薄な地域であったのかもしれない。新久遺跡の調査は今回が初めてであり、今後調査事例の増加により、遺跡の様相が明らかになっていくものと思われる。今後の調査に期待したい。

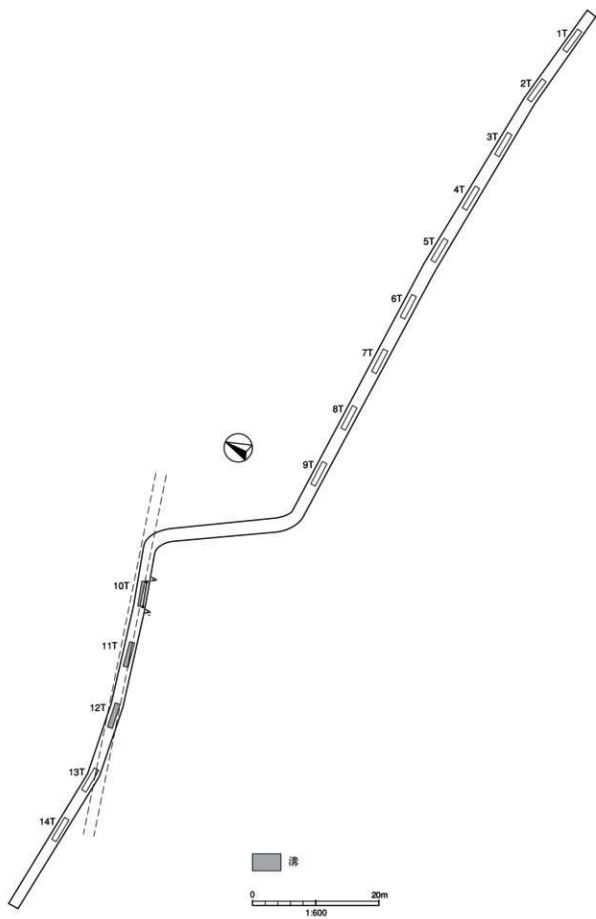
5. 麦丸遺跡 c 地点



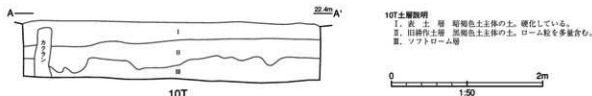
第15図 麦丸遺跡位置図 (S=1:5,000)

調査に至る経緯

平成11年11月15日、八千代市長（八千代市役所農政課）より市内麦丸字ササメ山1151付近の90㎡について農道舗装のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、照会地及び隣接する畑地において稀少ではあるが縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、11月18日その旨回答した。その後11月29日先の照会地の延長部234㎡について追加の照会が提出され、現地踏査の結果、12月7日先の回答と同様に照会地全域について確認調査が必要との回答を行った。その後、この回答に沿って八千代市役所農政課と協議した結果、平成12年1月20日併せて324㎡について文化財保護法第57条の3第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った2月23日に八千代市教育委員会が調査を開始した。



第16図 麦丸遺跡c地点遺構検出状況図



第17図 麦丸遺跡c地点土層断面図

遺跡の立地と概要

麦丸遺跡は、八千代市中央部、新川と桑納川の合流する地点の南岸の舌状台地上に立地している。この舌状台地は東側と西側を新川及び桑納川の低地からそれぞれ入り込む谷津によって開折されている。標高は約20～24m、新川の低地との標高差は約16～20mである。

麦丸遺跡では、今回の調査を除いてこれまでに2地点において調査が実施されている(註1)。b地点は舌状台地の基部に位置している。昭和56年度に八千代市遺跡調査会によって調査が実施され、縄文時代後期の遺物包含層が検出されている(註2)。d地点は桑納川を臨む台地縁部に位置している。平成13年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され、縄文時代早期炉穴1基と時期不明溝1条が検出されている(註3)。またこの他に同じ舌状台地上には麦丸古墳群(註4)・大日前塚群・金塚所在塚(註5)が立地している。

今回の調査区はc地点である。c地点は新川側の台地縁部から台地中央平坦部にかけて位置している。標高は22m前後である。調査区周辺では縄文土器・弥生土器・古墳時代土器等の散布が確認されていることから、今回のc地点の調査では該期の遺構の所在が想定された。

調査の方法と経過

調査は、調査区が幅約2mの農道であるため、道の中央に0.8m×4mを基本とするトレンチを14箇所、約6m間隔でクランク部を避けて設定して実施した。水道管が埋設されていることからこれに留意し、44.8㎡について表土除去・検出作業を行い、遺構の捕捉に努めた。

調査期間は平成12年2月23～25日である。23日器材搬入、トレンチ設定、23・24日人力による4T・9T・10T・13T表土除去作業、遺構検出作業、24日重機による1～3T・5～8T・11T・12T・14T表土除去作業、遺構検出作業、10T実測・撮影等記録作業、重機によるトレンチ埋め戻し作業、25日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、I表土層、II旧耕作土層、IIIソフトローム層、IVハードローム層となっている。農耕によるためであろうか、II旧耕作土層下は、10～14Tがソフトローム層、1～9Tがハードローム層であった。地表面から遺構検出作業面までの深さはそれぞれ約0.4～0.5m、約0.8～1.1mである。

調査の結果、検出された遺構は10～13Tより検出された時期不明の溝1条のみであった。遺物はトレンチからの出土はなく、縄文土器及び古墳時代土器の小片を数点表採できたのみであった。

調査のまとめ

調査区及びその周辺においては縄文から古墳時代にかけての遺物の散布が稀少ではあるが確認されている。今回の調査でも該期の遺構を期待したが、時期不明の溝を1条検出できたのみで、遺構を検出することはできなかった。調査区が幅約2m、長さ約180mの農道部分のみであることからやむを得ない結果であったといえる。今後の調査に期待したい。

(註1) 麦丸遺跡a地点は、c地点の南東約400mの谷津を隔てた舌状台地上に位置している。1980年送電鉄塔の建て替えに伴い八千代市送電線所在遺跡調査会により調査されたが、遺構は検出されなかった。現在は遺跡名が麦丸遺跡から麦丸宮前上遺跡に変更されている。

(註2) 八千代市遺跡調査会 1982 『千葉県八千代市麦丸遺跡』

(註3) 八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』

(註4) 八千代市史編さん委員会 1979 『八千代市の歴史』 八千代市

(註5) 八千代市教育委員会 2002 『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書』1

6. 子の神台遺跡 a 地点

調査に至る経緯

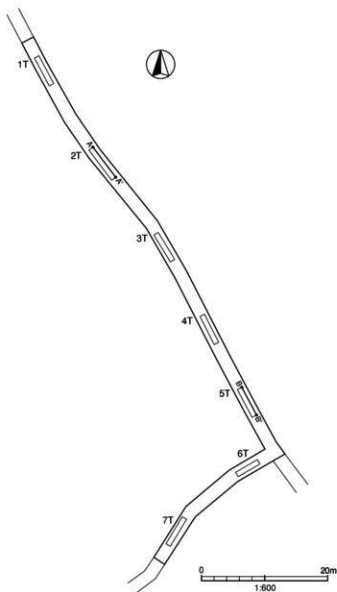
平成13年5月25日、八千代市長（八千代市役所農政課）より市内佐山字専上2267-1～子ノ神台2359付近の約500㎡について農道舗装のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、照会地及び隣接する畑地において縄文土器等の遺物の散布を確認することができた。照会地は周知の遺跡の範囲内であり、過去の周辺の調査実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、6月13日その旨回答した。その後、この回答に沿って八千代市役所農政課と協議した結果、発掘調査は平成13年度と平成14年度の2回に分けて実施することとなり、9月11日照会面積約500㎡のうち268㎡について文化財保護法第57条の3第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った11月12日に八千代市教育委員会がa地点の調査を開始した。

遺跡の立地と概要

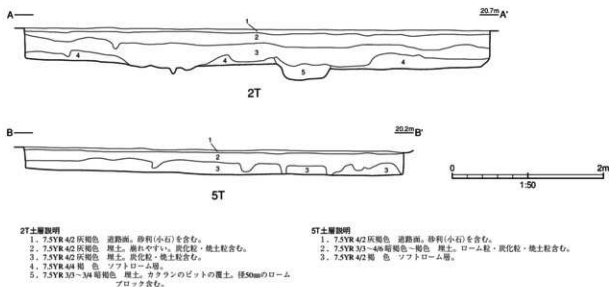
子の神台遺跡は、市域の北部、神崎川の南岸に当たる台地上先端部に立地している（第1図）。この台地上には隣接する遺地遺跡・新久遺跡、さらに佐山貝塚・田原遺跡等が連なり各時代に渡って遺跡が展開している。今回の調査地点は、神崎川の低地から南東方向に入る専上谷津の東側に当たる台地上の縁辺付近である。標高は20m前後である。

本遺跡は、以前佐山寺ノ下（佐山寺の下）遺跡と呼ばれ、2地点が調査されている。改称した理由は、「佐山寺の下」という地名が台地北方の水田面の地名であり、台地上の遺跡の名称として不適切であると判断したためである。

1地点目は、東京電力送電鉄塔の建設に伴う昭和53年11月～12月の調査で、今回調査地点の北北東約200mの地点である。神崎川の低地に面する台地上の縁辺部で、ここからは古墳時代中期の住居跡と平安時代の住居跡各1軒が交わった状態で検出された（註1）。2地点目は昭和58年3月に行われた調査で、今回調査地点の北東約100mの地点である。神崎川の低地から南西方向に入る谷の南側に当たる台地上の縁辺付近である。調査面積90㎡で、弥生時代後期の住居跡と古墳時代前期の住居跡が各1軒検出された（註2）。これらの調査結果から、本遺跡の北部には濃密な遺構の分布が想定される。今回調査地点の周辺の遺物散布はやや疎であるが、専上谷津付



第18図 子の神台遺跡 a 地点トレンチ配置図



第19図 子の神台遺跡 a 地点土層断面図

近の状況の一端を確認できるものと期待した。

調査の方法と経過

調査区は農道であるため、道の中央に0.8m×5mを基本とするトレンチを7箇所、約10m間隔で設定し、北から順に1T・2T・3T・・・7Tとした。約28㎡を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成13年11月12日～15日である。調査経過は、12日に器材・重機搬入、トレンチ(1～5T)設定、重機表土剥ぎ作業、13日に清掃検出作業、土層調査、平面図作成、14日に重機1～5T埋め戻し作業、6T・7T設定、重機表土剥ぎ、清掃検出、15日に6T・7T平面図作成、埋め戻し作業で調査を終了した。

調査の概要

全体的に地表面は敷石の小石を含む土で、1T・2Tでは、その下はロームが混じった灰褐色・暗褐色・褐色の埋土であり、地表下10cm～40cmでソフトローム層に急変し、地表下46cmでハードローム層の上部に達する。4～6Tでは地表下15cmでソフトローム層、28cmでハードローム層である。7Tでは敷石の直下がソフトローム層であった。各トレンチで攪乱が認められた。これらの結果から、この付近は全体的に土が削られているらしいことがわかった。

遺物は13点で、1T・2T・3Tから2点ずつ、5Tから7点出土した。いずれも小片で、時期決定は困難であるが、縄文土器が2点、弥生土器が2点、古墳時代前期土師器が1点、素焼き土器が2点、陶器が4点(うち1点すり鉢)、不明1点である。その他、表面採集で弥生土器片や泥面子を確認した。いずれも小片であるため図は省略した。

遺構は検出されなかった。

(註1) 渋谷 貢 1980 「東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書」 八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会

(註2) 八千代市教育委員会 1983 「千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告書 一昭和57年度調査の概要一」

7. 子の神台遺跡 b 地点

調査に至る経緯

調査に至る経緯については、子の神台遺跡 a 地点の章で述べた通りである。

平成14年9月25日照会面積約500㎡のうち未調査分の240㎡について文化財保護法第57条の3第1項の規定による土木工事のための発掘届が八千代市長（八千代市役所農政課）より提出され、準備が整った10月22日に八千代市教育委員会が b 地点の調査を開始した。

遺跡の立地と概要

子の神台遺跡の立地と概要については、子の神台遺跡 a 地点の章で述べた通りである。

今回の調査区 b 地点は、a 地点の北側延長部分に当たる（第1図）。神崎川の低地から南東方向に入る専上谷津東側の台地上の縁辺部である。標高は18～20m前後である。

調査の方法と経過

調査は、調査区が幅約2mの農道であり、道の中央に水道管が埋設されていることから、これを避けて幅約1m、長さ約5mを基本とするトレンチを6箇所、約15m間隔で設定して実施した。状況に応じて適宜トレンチの延長を行い、32㎡について表土除去・検出作業を行い、遺構の捕捉に努めた。

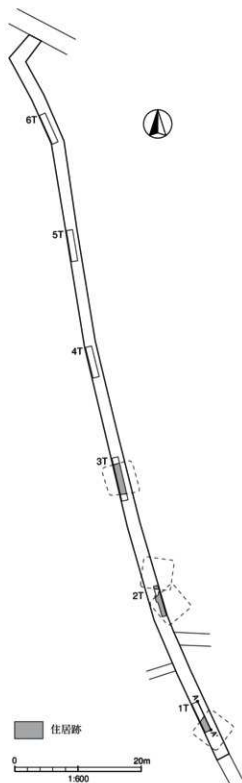
調査期間は平成14年10月22～30日である。22日器材搬入、トレンチ設定、重機によるトレンチ表土除去作業、遺構検出作業、1T土層断面実測・撮影等記録作業、重機による1T・3～6T埋め戻し作業、22～29日2T住居跡遺物検出・実測・撮影等記録作業、29日人力による2T埋め戻し作業、30日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

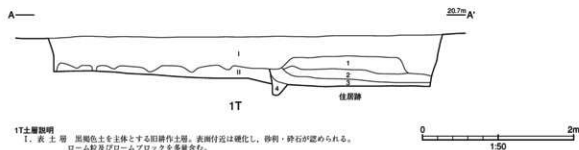
調査区の基本層序は、Ⅰ表土層、Ⅱソフトローム層となっている。農耕によるためであろうか、Ⅰ表土層下は、ソフトローム層であった。地表面から遺構検出作業面までの深さは約0.4～0.8mである。

調査の結果、住居跡4軒を検出することができた。1T及び2Tより検出された住居跡は出土遺物から古墳時代後期の所産であると判断した。また、3Tより検出された住居跡からは遺物の出土はなかったものの、1T及び2Tより検出された住居跡と覆土等の状況が類似していることから、同じく古墳時代後期の所産と判断した。

遺物は、弥生土器・古墳時代後期土師器・奈良平安時代土師器などが出土している。特に2Tより検出された古墳時代後期住居跡からはカマド左脇より遺物がまとまって出土した。確認調査のため出土した遺物の周りをト

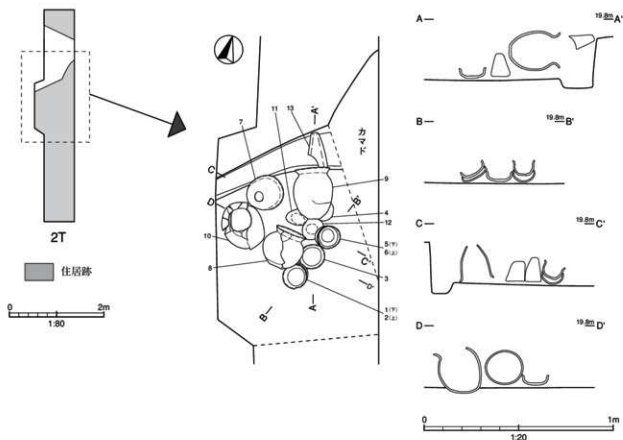


第20図 子の神台遺跡 b 地点遺構配置図



- 1T土層説明
- I. 表土層 黒褐色土を主体とする旧耕作土層。表面付近は硬化し、砂利・碎石が認められる。ローム粒及びロームブロックを多量含む。
 - II. ソフトローム層
 1. 黒色土 ローム粒を微量含む。
 2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。[55~20cm]のロームブロックを微量含む。
 3. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
 4. 黒褐色土 ローム粒を多量含む。

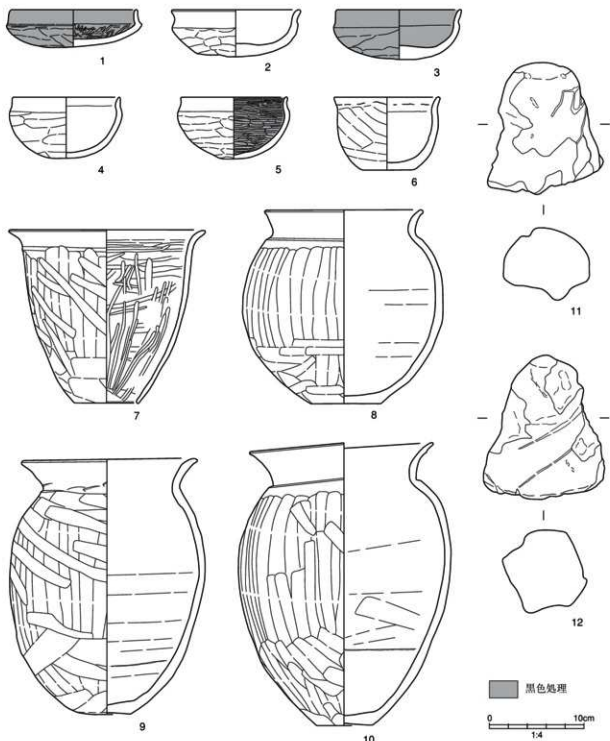
第21図 子の神台遺跡b地点土層断面図



第22図 子の神台遺跡b地点2T住居跡実測図

レンチ幅でしか調査できなかったが、最終的に土師器坏6点・土師器甕3点・土師器瓶1点・支脚3点を確認した。遺物はいずれも完形あるいはほぼ完形で、9・13を除きカマド左脇の床面に並べられた状態で出土している。1～6は土師器坏で、カマド側から6(上)と5(下)が重ねられた状態で、その隣に3が、さらにその隣に2(上)と1(下)が重ねられた状態でそれぞれ正位で一列に並んで出土している。3・5・6の北側には4が倒位で、支脚2点(11・12)が正位で出土している。1・2・3の西側には土師器甕(8)が横位で、そして8の西側にも土師器甕(10)が正位で、さらに10の北側の周溝際には土師器瓶(7)が倒位で出土している。また、カマドのすぐ左脇からは土師器甕(9)と支脚(13)が床面より浮いた位置よりそれぞれ横位で出土している。

今回の調査では、確認調査のため、出土した遺物の周りをレンチ幅でしか調査できなかった。そのため、2T検出の住居跡は周溝と床の一部を検出したのみで規模等は不明である。検出した部分での住居跡床面までの深さは遺構確認面から約0.2~0.25mで、周溝の深さは約0.05mであった。



第23図 子の神台遺跡b 地点2T住居跡出土遺物

調査のまとめ

今回の調査では古墳時代後期住居跡4軒を検出することができた。これまでの子の神台遺跡（佐山寺ノ下遺跡を含む）の調査では、弥生時代後期住居跡1軒、古墳時代前期住居跡1軒、同中期住居跡1軒、平安時代住居跡1軒が検出されているが、古墳時代後期住居跡の検出は初めてである。専上谷津の最奥部に位置するa地点においては遺構は検出されなかったものの、今回の調査によって、子の神台遺跡の集落が神崎川を望む台地上縁辺部から専上谷津沿いの台地上縁辺部にかけても展開しており、その時代も多岐にわたることが確認できた。また、

第1表 子の神台遺跡b地点2T住居跡出土遺物観察表

〔単位mm〕

No.	器種	口径 器高 底径	遺存度	成形・調整の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	136 39 —	完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	長石、雲母、石英、赤色粒子	良好	暗茶褐色	内外面黒色処理
2	土師器 坏	136 49 —	ほぼ完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ナデ。	長石、雲母、黒色粒子	良好	淡茶褐色	
3	土師器 坏	132 52 —	完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、雲母、赤色粒子	良好	淡褐色	内外面黒色処理
4	土師器 坏	113 65 —	完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、雲母、砂粒、赤色粒子	良好	淡橙褐色	
5	土師器 坏	113 65 —	完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	長石、雲母	良好	茶褐色	内面黒色処理
6	土師器 坏	113 77 55	完形	口縁部横位ナデ。体部外面横位ヘラケズリ後、ナデ。内面ナデ。	長石、雲母、砂粒	良好	茶褐色	
7	土師器 瓶	208 68 68	完形	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ後、斜横位ヘラケズリ。内面ヘラケズリ後、ヘラミガキ。底面穿孔。	長石、雲母、砂粒、赤色粒子	良好	淡橙褐色	
8	土師器 甕	168 205 76	ほぼ完形	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ後、下位横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、雲母	良好	淡橙褐色	
9	土師器 甕	186 270 59	完形	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ後、斜横位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、雲母、砂粒、赤色粒子	良好	黒褐色	
10	土師器 甕	195 296 60	ほぼ完形	口縁部横位ナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ後、下位斜位ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	長石、雲母、砂粒、黒色粒子	良好	橙褐色	
11	支脚	全長140。上部径60×40。下部径125×(80)。重さ690g。ナデ整形。淡褐色。						
12	支脚	全長152。上部径40×40。下部径124×122。重さ1,090g。ナデ整形。淡褐色。						
13	支脚	崩壊してしまったため実測不可。						

トレンチ幅の調査であったため具体的な考察は避けるが、2T検出の古墳時代後期住居跡からは土師器の一括資料を得ることができた。b地点の調査は幅約2m、長さ約130mの農道部分のみの確認調査であったが、予想以上の成果を上げることができたといえるであろう。今後の子の神台遺跡の調査が期待される。

参考文献

- 八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会 1980 「東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書」
八千代市教育委員会 1983 「千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告書 一昭和57年度調査の概要一」



(1) 沼上遺跡調査前近景



(2) 沼上遺跡トレンチ完掘状況



(3) 妙見前遺跡調査前近景



(4) 妙見前遺跡1T土層断面



(5) 妙見前遺跡1T溝検出状況



(6) 妙見前遺跡12T地形整形遺構検出状況



(7) 妙見前遺跡16T地形整形遺構検出状況



(8) 妙見前遺跡17T地形整形遺構検出状況



(1)川崎山遺跡；地点調査前近景



(2)川崎山遺跡；地点A1-73-4G土層断面



(3)川崎山遺跡；地点1号土坑土層断面



(4)川崎山遺跡；地点1号土坑完掘状況



(5)川崎山遺跡；地点2号土坑土層断面



(6)川崎山遺跡；地点2号土坑完掘状況



(7)川崎山遺跡；地点3号土坑土層断面



(8)川崎山遺跡；地点3号土坑完掘状況



(1)川崎山遺跡；地点1号溝完掘状況



(2)川崎山遺跡；地点2号溝完掘状況



(3)川崎山遺跡；地点3号溝完掘状況



(4)川崎山遺跡；地点調査風景



(5)新久遺跡調査前景（北東から）



(6)新久遺跡調査前景（南西から）



(7)新久遺跡5T上層断面



(8)新久遺跡調査風景



(1) 麦丸遺跡 c 地点調査前近景 (東から)



(2) 麦丸遺跡 c 地点調査前近景 (西から)



(3) 麦丸遺跡 c 地点10T土層断面



(4) 麦丸遺跡 c 地点調査風景



(5) 子の神台遺跡 a 地点調査前近景



(6) 子の神台遺跡 a 地点トレンチ完掘状況



(7) 子の神台遺跡 a 地点2T土層断面



(8) 子の神台遺跡 a 地点5T土層断面



(1) 子の神台遺跡b地点調査前近景(南から)



(2) 子の神台遺跡b地点調査前近景(北から)



(3) 子の神台遺跡b地点1T土層断面



(4) 子の神台遺跡b地点2T住居跡検出状況



(5) 子の神台遺跡b地点2T住居跡遺物出土状況



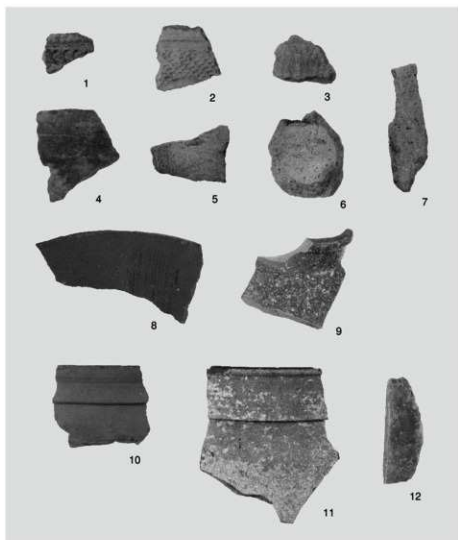
(6) 子の神台遺跡b地点2T住居跡遺物出土状況



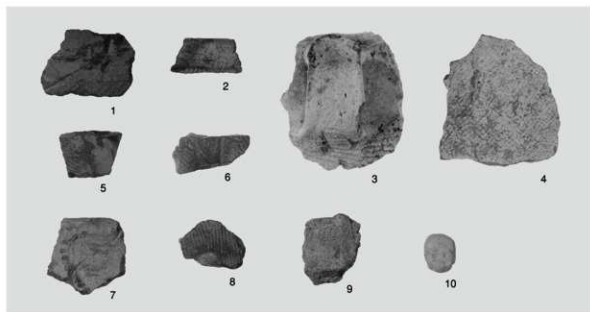
(7) 子の神台遺跡b地点調査風景



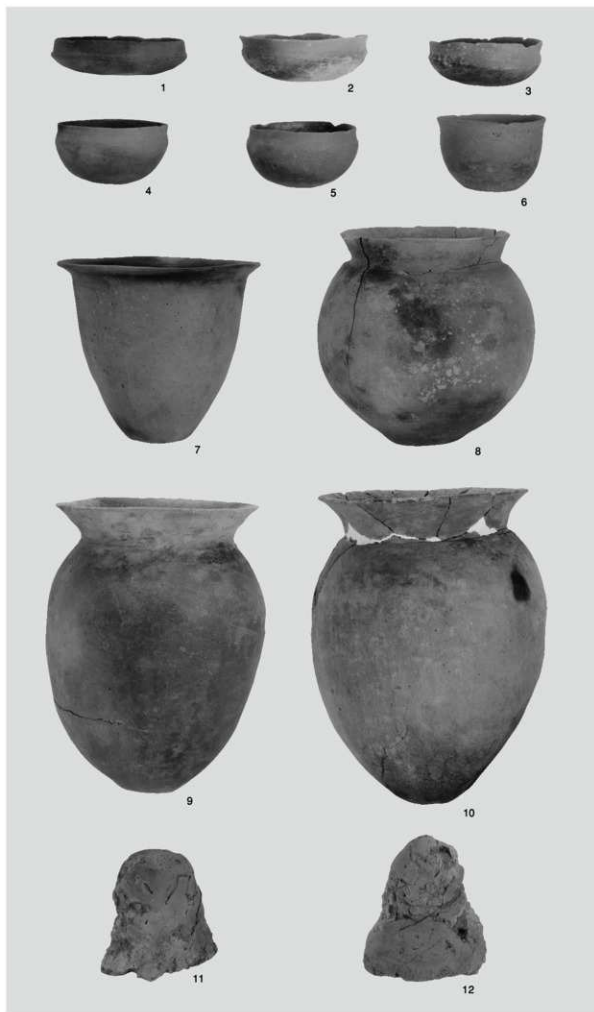
(8) 子の神台遺跡b地点調査風景



妙見前遺跡出土遺物



新久遺跡出土遺物



子の神台遺跡b地点出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしこうきょうじぎょうかんれんいせきぱつくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書
編著者名	武藤健一・森 竜哉・常松成人
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL 047-483-1151
発行年月日	西暦2003年(平成15年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぬまがみ 沼上遺跡	やちよしひらとあざぬまがみ 八千代市平戸字沼上34-1	12221	17	35度 46分 17秒	140度 7分 4秒	19940921	確認調査 9.6㎡/48㎡	防火水構建設
みょうけんま 妙見前遺跡	やちよしよはしあざみょうけんま 八千代市吉橋字妙見前地先	12221	133	35度 44分 32秒	140度 5分 55秒	19980112 ～ 19980122	確認調査 49㎡/316.8㎡	農道舗装
かわさきやま 川崎山遺跡 j 地点	やちよしかわさきやま 八千代市萱田町字川崎山743-1、 744-1	12221	241	35度 43分 10秒	140度 6分 45秒	19991006 ～ 19991029	確認調査 873.5㎡/9,483.86㎡ 本調査 53.5㎡	樹木伐採・移植・抜根
あらく 新久遺跡	やちよしやまあざあらく 八千代市佐山字新久232付近	12221	15	35度 46分 20秒	140度 6分 57秒	20000215 ～ 20000217	確認調査 32.8㎡/216㎡	農道舗装
むさまる 菱丸遺跡 c 地点	やちよしむさまるあざむさまる 八千代市菱丸字ササメ山1160付近	12221	151	35度 44分 32秒	140度 6分 25秒	20000223 ～ 20000225	確認調査 44.8㎡/324㎡	農道舗装
ねのかみだい 子の神台遺跡 a 地点	やちよしやまあざねのかみだい 八千代市佐山字専上2267他	12221	16	35度 46分 24秒	140度 7分 2秒	20011112 ～ 20011115	確認調査 28㎡/268㎡	農道舗装
ねのかみだい 子の神台遺跡 b 地点	やちよしやまあざねのかみだい 八千代市佐山字子ノ神台2321他	12221	16	35度 46分 26秒	140度 6分 58秒	20021022 ～ 20021030	確認調査 32㎡/240㎡	農道舗装

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沼上遺跡	包蔵地	縄文時代	なし	なし	
妙見前遺跡	城館跡	中世	堀溝 1条 6条 地業整形遺構6箇所	中世陶器、土師質土器	吉橋城関連遺跡
川崎山遺跡 j 地点	包蔵地	縄文時代 近世以降	土 坑 3基 3条	なし	
新久遺跡	包蔵地	縄文時代 弥生時代	なし	縄文土器、弥生土器、泥めんこ	
菱丸遺跡 c 地点	包蔵地	縄文時代 古墳時代	溝 1条	縄文土器、古墳時代土師器	
子の神台遺跡 a 地点	包蔵地	縄文時代 弥生時代 古墳時代	なし	縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器、陶器	
子の神台遺跡 b 地点	包蔵地	縄文時代 弥生時代	なし	縄文土器、弥生土器	
	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡 4軒	古墳時代土師器	

千葉県八千代市

公共事業関連遺跡発掘調査報告書

印刷日 2003年 3月28日

発行日 2003年 3月31日

発行 八千代市教育委員会

〒276-0045

千葉県八千代市大和田138-2

TEL 047-483-1151